

BCJA Newsletter

No.4

September 31, 1995

四十年後に

水田 洋

1

五月なかばにスコットランドの目がさめるような緑を見たとき、ちょうど四十年まえにグラ・ズゴウで、はじめてのスコットランドの冬を生きのびたことをおもいだした。毎日、雨にぬれて図書館にかよう冬だった。まだスモッグがあった。四十年もたてば、日本ではアダム・スミスを研究するだけで生活できるのかと、目をまるくしたカコ・ディのバスの女車掌もおばあさんになっただろうし、ひとごとではなく、ぼくも年をとったわけだ。一九七三年五月には、この話をして「そのとおりであります。スミスの研究で生活できましたし、それだけでなく、こうしてカコ・ディ市に招待されたのです」といったら、市公会堂（アダム・スミス・ホール）に拍手がなりわたった。

じつをいうとまだ、アダム・スミスでくらしているのだ（年金とスミスと直接にはむすびつかないが）。いま、これを書いているアバディーン・トマス・リード研究所に、八月末まで滞在するのは、ひとつには、アダム・スミス蔵書目録の仕あげのためであり、もうひとつには、スミスの弟子たちをふくむこの地方の啓蒙思想をしらべるためである。

蔵書目録は、グラ・ズゴウのBCスカラ・時代のおわりごろ手をつけたのだから、これもまもなく四十年になる。もっとも、四十年間こればかりやっていたわけではなく、ケンブリッジUPからかんたんなものを出版して、ひとやすみしていた。いまやっているのは、全部現物にあたり、蔵書をスミスがどう利用したか、蔵書のなかにスミスがどう利用されているかを注記したもので、ワ・プロ原稿はA5で六五〇ページになる。このあとの方、すなわちスミスの影響の追跡はなかなかおもしろく、その一部分がアバディーン啓蒙のなかに見られる。スミスがどう利用したかについては、各国の研究者から何度も質問されるのだが、目録が出版されれば一挙に回答できることになるわけだ。

2

なぜ君は（そして日本人は）そんなにアダム・スミスに関心があるのだと、よくきかれた。これはぼくだけの経験ではない。スミスを生んだ西ヨ・ロッパ近代というものが、日本

にはなかった（あるいは、ゆがんだ形でしか輸入されなかった）からだというぼくのこたえは、一貫してかわらない。ポスト・モダンなどという流行をもちこんでも、モダンをまともに体験していない風土では、どうにもならないではないかとおもうのだ。

イギリスにきて、BBCテレビで議会の中継をみる。メイジャ対ブレアの論戦は、まさに論戦であって、日本の国会のおぎなりの問答とはちがう迫力がある。よくいわれることだが、日本人は自分のしっかりした意見というものをもたないから、まともな論戦ができない。BBCで、国有企業の民営化の結果について、労働党の調査結果を紹介していた。民営化によって、株主・消費者・従業員にどういう影響があったかというのだが、結論は株主がもうけただけだということだった。日本ではあまりテレビを見ないので、比較する資格はないかもしれないけれども、どうもNHKよりBBCの方が活潑なようである。日本には、国鉄民営化と三里塚問題（成田空港）が輸送行政の二大汚点だと断言する運輸官僚がいるが、それが政治のなかで討論されることはない。

本屋にしてみると、社会科学のコ・ナ・に、日本では影をひそめてしまったマルクス研究書がいくつも目につく。売れのこっているのではなく、出版が続いているのだ。マルクス主義がソヴェート政権の単占財でなくなるといって、自由な研究が可能になったわけだし、マルクスにはいぜんとしてそれだけの価値があるのに、日本のばあいには権威の崩壊とともに関心も消滅してしまったようである。

終戦五十年をイギリス人が、どううけとめているかにまで視野をひろげることが、スコットランドの北の片隅にはできないが、町角には、「われわれは民主主義のために戦ったのではなかったか」という討論会のポスターがあった。一方では侵略への反省もなかなかできないのに、他方では勝利がほんとうに民主主義のものであったのかという討論が提起されている。

(MIZUTA Hiroshi, 元明治大学, University of Glasgow, 1954-56)

三回退職した話

原 俊子

ブリティッシュ・カウンシル・スカラーでもフェロウでもない私がBCJAに加わらせて頂いているのは、たんに長年(1966から1990年)カウンシルに勤務していたおかげです。そして、この間、私は三回、退職するという珍記録を作りました。第一回の退職は結婚がきっかけでした。私は物ぐさで忙しいのが大嫌いです。常にしなければならないことに追いかけるのはまっぴら、つまり、ぼうっとしていられる時間がほしいということです。結婚相手の家事能力はあまり期待できず、家の仕事のほとんどは私がすることになりそうなのは予想がつかしました。夫は親切(?)にも、仕事をやめることはないんじゃないかと言ってくれましたが、こちらは外でフルタイムの仕事をした上で主婦業もするなんて、考えただけで、目がつり上がって機嫌の悪い自分の姿が頭に浮かび、とりあえず退職しました。世の中にはフルタイムの仕事と家事をこなし、しかも、子育ても立派にしとげる女性は大勢いますが、私はどう考えてもそういう器ではありません。

この第一期の勤務の思い出をひとつだけあげれば、1969年のブリティッシュ・ウィークです。いくつものデパートで大きなブリティッシュ・フェアが開かれたほか(これらは大使館の担当)、さまざまなイベントがあり、カウンシルも音楽会やパレエ公演、美術展など多くの催しに関わりました。私は、これらの日本側の主催者または共催者となったテレビ局や新聞社、美術館とのリエゾン役を仰せつかり、忙しいのが嫌いな人間が、なんと一時は一日に百回前後も電話をかけたり、受けたりする身となりました。この数字については、最多忙の時期を過ぎてほんの少し余裕ができたとき、試しに電話の度に正の字を書いて確かめたので本当です。ついには頭が混乱し、あるときAテレビ局のB氏と電話中にC新聞社のD氏と名前を取り違えて連呼し、話の終りに温厚なB氏に「あのう、ところでぼくはBです」とやんわりと言われたのをおかしくも懐かしく覚えています。

退職はしたものの、狭い2DKのマンションでは実はそれほど家事量はありません。それに、専業主婦となると家事の手抜きの言い訳がなく困るという次第で(このあたり、我ながら怠け者の面目躍如です)やめる前から、いずれは週に二、三日働ける場を探そうと考えていました。そこにうまくカウンシルから話があり、希望より少し多すぎましたが、週に四日の条件で、半年ほどのギャップの後、舞い戻ることとなりました。

これから約12年が、主としてスカラシップの担当となり、現在BCJAの会員となっていっしょの多数の方々を知り合えた時代です。実にさまざまな専門的関心を持つ皆さんと接するのは大変興味深く、多くを学ばせていただきました。おもしろかったのは自然に多彩な人間観察の場ともなったことで、人文科学、社会科学、自然科学の分野によって、それぞれに専攻する方々のタイプがあることを実感できました。むろん、人間は十人十色ですが、マスで見ると大ざっぱな像が浮かんできます。これについての私の感想は内緒の内緒ですが、万一、興味を持たれる方がいらっしゃいましたら、上等の食事に招待して下さい、おいしいお酒で酔わせれば、口をすべらせることもあるかもしれません。

できればもっと続けたい仕事でしたが、個人的な事情のため、1984年にふたたび退職を決意し、辞表を書きました。ところが、またしてもさまざまないきさつの末、今度は週に1日半の勤務で、やめずに留まることになったのです。のんきなことには、新しい仕事に変わってからも、すでに辞表を出し、当時のバーネット代表からの受理の手紙も受け取って

いたことは忘れていました。何日めかに思い出した私は、このこと代表のへやに出かけ、このままでは自分は今ここに存在しないはずだと言いました。結局、おたがいにもう一度キャンセルの手紙を書き合うのは面倒だから、両方ともなかったことにしようと言いつき、事務処理(?)は、その場でたがいの手紙を破棄し、笑って紙屑籠にほうりこむというおらかなものでした。

これから6年、1990年に最終的に(たぶん)退職するまでは、事務局担当のほかは個人的な留学相談が主な仕事でした。心に残っているのは、留学説明会に出席したある若い弁護士さんが下さったお礼状の一節です。「先日の会では、留学について何も知らない自分でも常識で考えてばかばかしいと思う質問や、あなたは数えきれないほど何度もきかれていないと思う質問がいくつも出た。それでも、あなたはうんざりした態度を絶対に見せずに根気よく丁寧に答えていた。あなたと同様、一種、接客業的な面もある弁護士という仕事に携わる者として学ぶ所があった」そんな趣旨でした。私は別に意識してそう努めていたわけではなく、仕事なら当然じゃないかという気もあって、初めはうれしいより少し意外な感を受けました。でもそのうち、意識的ではなかっただけに、私の中の自分としては自然な何かを思いがけずほめてもらえたのだと素直に(またはおめでたく)取れるようになり、じんわりとうれしくなる手紙でした。

最後の二、三年に印象的だったのは、英国の大学が急速に大衆化の方向に向かい、同時に、やや、なりふりかまわずと思えるほど留学生の受け入れに積極的になったことでした。最近五年間の事情はさっぱり勉強していませんが、知りたくもあり知りたくもなしという心境です。

こんな次第で二十数年が過ぎました。どんな仕事でもひとりだけでできるものではありませんが、特に私が変則的な形での仕事を長く続けることができたのは、まわりで支えてくれた同僚のおかげと今でも深く感謝しています。

さて、四回めの退職は・・・。現在、私は五十六歳、カウンシルの停年までまだほぼ四年あります。つまり、数字の上では再々々就職および退職の可能性もあり得ますが、現実には考えられません。ひとつの勤務先から四回の退職となれば、ギネスブックものかとも思うのですが。

最後に英国にエールを(ちなみに、声援の意味でエール(yell)という言葉を使うのは米語だと辞書にあるのは本当ですか？ そうだとすると、BCJAニューズレターにはふさわしくない単語ですが、ここは日本語ですで見逃して下さい)。国際経済、国内経済はもちろん、我が家の家計に至るまで自他共に認める経済オンチの私ですが、円高ドル安が話題になるたびに、ドルよ嘆くな、と言っています。私がカウンシルに入った当時、ポンドとドルはそれぞれ1000円と360円の固定相場でした。それが95年4月上旬の今、ポンドは150円を割り、ドルは90円を割っています。つまり、円と見比べた場合、ドルの値打ちは四分の一に減ったのに対し、ポンドはなんと六分の一以下になってしまったのですから。夫も私もどちらかという日本酒党ですが、時々、特売のスコッチウィスキーを買って英国経済を支援しています。

がんばれ英国、がんばれブリティッシュ・カウンシル！

(HARA Toshiko, former British Council Staff)

ロンドン留學生活の思い出断片

佐藤昌康

私達、第二回のBritish Council (B.C.) Scholar 一行9名は、1952年7月17日、英国籍の貨客船Sangolaに乗船して神戸港を出港した。9名は、脇坂行一、宮島龍興、大平五郎、小沢保知、小島清、定永西一、川島芳郎、山脇百合子および私である。7月22日にホンコンに着き、しばらく市内のChurch Guest Houseに滞在した後、8月1日にP&O会社の客船Carthageに乗船してホンコンを出港した。その後、船はシンガポール、ペナン、コロombo、ボンベイ、アデンに立ち寄った後、スエズ運河を抜けて8月24日にはポートサイドに着き、此処から地中海を航海して9月2日にやっとサザンプトンに着いた。神戸を出てから48日目に英国の土を踏んだことになる。船中では、毎朝6時半になると、ボーイが船室のベッドに寝ている私達にティーとビスケットを持参してくれた。アーリーモーニングティーで、これが英国式ティーとの馴れ初めである。夜になると、映画、ピンゴ、競馬、ダンスなどの娯楽があり、長い船旅ではあったが、結構それで気が紛れたように思う。

昨年、夏目漱石のことに興味を覚え、漱石に関するいろいろな書物を読み漁った。それらの資料によると、彼は文部省の在外研究員として英語研究のために、1900年9月8日にドイツ船で横浜港を出港し、ナポリに入港した後、汽車でパリに10月21日に着き、10月28日にロンドンに到着している。横浜を出てから51日目である。私達の渡英の時代よりも約50年前であるのに、日本からロンドンへの旅の長さにあまり差が無い。しかし私達が英国を訪れた時代から以後の40年の間に、航空機の発達と普及によって、渡英の時間が大幅に縮まってしまった。

ロンドンで私は下宿生活をして、East Finchley 駅から地下鉄に乗り、Euston Square Station で下車して、Gower StreetにあるUniversity Collegeの生理学教室まで通った。そこではネコの感覚受容器の研究をして1年10月を過ごした。当時は、1ポンドが約1000円の時代であつたが、British Councilから毎月支給される35ポンドの金で適当に劇場や音楽会に出掛けたり、パブでビールを飲んだりしていた。ロンドンに住んでいる日本人も少なく、外務省、銀行、特別な商社の人達が僅かにいらただけである。日本料理屋も開店していず、米の飯を食べたくなるとチャイニーズレストランやインディアンレストランに出かけたものである。

このような独り暮らしの私達留学生を慰めて下さったのは、ロンドンに長く住んでいられた少数の日本人の方々である。大倉商事の川瀬さんというおじいさんは時々日本食をご馳走して下さい。毎日新聞の藤田敏勝さんにも御世話になった。1953年の6月初めにエリザベス女王の戴冠式があり、日本からも多数の報道関係の人達がロンドンにきたが、作家の獅子文六さんもやってこられ、藤田さんに依頼されて獅子文六さんを美術館に案内したことも思い出す。またロンドンで2年目の勉強をしていられた第一回のB.C. Scholarの市井三郎さん(哲学専攻)、山田幸男(法学専攻)さんとは、パブでしばしばビールを飲みながら、いろいろな話を聞かせて貰った。これらの方々は、私が日本に帰国した後10年位の中に皆さん亡くなられてしまわれ、誠に残念である。

私がロンドンにいた頃、フランクダニエルズさんというロンドン大学(School of Oriental and African Studies)の日本学の教授がいられた。この方は戦前、小樽高商で長く英語を教えられた方である。この方の奥さんのおとめさんは私達を心から可愛がって下さって、マダムタッソーの近くにあるお宅に私達を時々招いて下さり、すき焼の御馳走をして下さった。キッパスという乾した魚を御馳走になって故郷を思い出し、

"キッパスの匂い懐かしクリスマス"という拙い俳句を作ったりした。ロンドンを訪れた日本人の方々でおとめさんの御世話になった人は数多くいられると思う。おとめさんは大変、日本の風物を愛していられた。私が帰国した後、多分1958年ごろ御夫妻で日本に1年間程来られ、その後もう一度日本を訪ねられたように記憶する。私も、当時住んでいた熊本から上京した折りにお会いしたが、それがおとめさんの日本への最後の旅ではなかったであろうか。

最近、私の勤め先の近くの古書店で、『戦中ロンドン日本語学校』(大庭定男著、中公新書)という文庫本を見つけ、中を覗いてみたら、フランクダニエルズ、おとめダニエルズの名があったので、懐かしく思い、購入して読んでみた。この本は、第二次大戦中、軍の必要のために日本語教育を若い大学卒業生に施すために設立された学校のこと、そこでの日本語教育のこと、教官や学生達のことを記したものである。この学校の功績として著者は、戦後、"卒業生の相当数が日本学者になり、多くの著書を出し、日本語と日本についての多くのことを後進に教えてきた。また外交官、公務員、実業家などで日本との関係を持ち続けてきた者もかなりの数に上っている。そしてこれらの人々の努力により、終戦後の英国内の排日感情が和らぎ、広く全世界に日本の真の姿を紹介し、日本を国際社会に復帰させ、その後の経済摩擦などの緩和に、どれだけ、陰に陽に貢献してきたかは、はかり知れないものがある。"と記している。この書によれば、フランクさんとおとめさんは、この学校で熱心に日本語を教えられたそうである。おとめさんは生徒たちに、"現在、敵国という関係もあるが、日本のことがあまりにも曲げられて伝えられている。これから、日本人に接して行くあなた方には、日本の風俗習慣について正しい知識を持ってもらわなければならない。これを教えるのが私の務めです。"と語っていたという。ダニエルズ御夫妻は1975年(昭和50)に日本に招待され、旧友、知己に会われたが、翌年早々に帰国後おとめさんは体調悪化され、76年の生涯を閉じられた、と記してある。

最後に付け加えると、1952年に英国に旅立った私達B.C. Scholar 9名は今も皆健在で、最近は、年に1回位の割合で集まり、昔の思い出など語り合うことにしている。

(SATO Masayasu, ブレインサイエンス振興財団理事長、University College London, 1952-1954)

当会の委員でもあられる白鳥 令先生がこのたびルーマニア・コンスタンチア大学から名誉博士号(Doctor Honoris Causa)の称号を授与されました。

ルーマニアにおいて日本人への名誉博士号は民主革命後初

ケンブリッジと自然

青山富士夫

24年前にイギリスの地を初めて踏み、その後数回ケンブリッジを訪れ、大いに魅せられた者が見たり感じたりしたことを少々書いてみたいと思います。ワーズワースのルーシー・グレイは、午後2時に教会の鐘が鳴る頃、すでに冬空に月が出ていることに気付きました。イギリスでは冬至の頃、太陽が南の空を低く弧を描いて移動し、正午が過ぎると、それとなく夕方の気配が感じられます。しかし、1月に入ると日差しが少しずつ高くなって、明るさが増して来ます。花木の芽が動き始め、野や庭の草花が咲き始めます。芝生には雑草として嫌がられる白いデイジーの花がぼつんぼつんと咲き始めます。アコナイトと呼ばれる黄色の小花が可憐な姿を見せます。

ケンブリッジでは、街の中心を離れると、自然が広がり、どこにでも絵になるような風景が見られます。特に早春の自然は美しく活気に満ちています。暗い冬が終わり、自然が活動をし始めます。逸早く咲くれんぎょうや黄梅の鮮やかな黄色の花が春の訪れを告げます。8月になると、カレッジの庭に植えられた球根類が一斉に咲き出します。特にカム川に面したカレッジの庭には、ブルーベルの長いじゅうたんが敷き詰められます。らっぱ水仙ががすかな風に揺られています。

この頃になると歩道に面した家々の花壇を覗くのが楽しみになります。小さなロックガーデンが作られていることもあり、そこには野生のピンクのミニシクラメンや紫色のムスカリーが咲いていたりします。時には赤味がかかった黄澄色の小花をさげるめぎの灌木を見つけて興奮したこともありました。春真盛りの5月には、さんざしの生垣がピンクや白の花で飾られます。講義室や大学図書館に通う道すがらに出会う種々の植物を列挙すれば限りがありません。

何世紀にもわたって次々にカレッジの建物がふやされ、大学町が発展していったのですが、そのために自然が破壊されていったようには思われません。人工が巧みに自然の中に融け込んでいる感じを受けます。そこには歴史の重みを感じられます。恐らくニュートンもワーズワースも私が見たようなケンブリッジの自然を見たのかも知れません。ますます人工が加わって来ているとは言え、ケンブリッジはイギリスの広々とした自然の一部を成しています。

川に浮かぶ水鳥を眺めたり、植物園の樹木を駆け上がるりすの姿を見かけたりすると、熱い喜びが湧き出てきます。自然との共感が体内を流れます。ケンブリッジの自然の中を散歩していると、ポーブの描いたウィンザー・フォレストの静的な自然とワーズワースの動的な自然とが一体となって眼前に現れて来るような気がしてなりません。これからも機会があればケンブリッジを訪ねたいと思っています。

(AOYAMA Fujio, 青山学院大学、University College, University of Cambridge, 1971-72)

Fellowship Grantsのお陰

中村高遠

1987年5月、半ば諦めていたBritish Council Fellowship Grantsが戴ける旨の手紙を受け取り、大急ぎで自分の仕事を夏休み前までに整理し、1年間引き受けるはずであった非常勤講師も後期を他の人にお願ひしてに英国に向かったのは9月1日でした。そしてBrunel大学に1年間滞在。その間、化学科のスタッフと同等の扱いを受けて快適な環境で多孔性触媒についての共同研究をすることができました。またお二人のFellowの推薦でThe Royal Society of Chemistryのmemberに加えて戴き、現在も度々英国の学会に出席できる機会が与えられることに深く感謝しております。その一方で、滞在期間中にあった偶然の出会い、それから何度となく訪れても故郷を感じさせてくれる心優しい人々。昨日の出来事のように思い出される体験の一部を紹介したいと思います。

私の家族が借りた家はMetropolitan line最終駅Uxbridgeからバスで5・6分のところにある5棟続きのテラスハウスの端、そこに落ちついたのはHeathrowに到着した日の午後でした。Anchorageでの飛行機のトラブルによる1日遅れの長旅。不動産屋との契約、Sainsbury'sで2、3日分の食べ物の購入。「やれやれゆっくりできる。」そう思ったのも束の間、トラブルが起きた。ガス暖房を運転しようとして試みたが着火しない。困っているちょうどそのとき、家の外で子供の声があるではありませんか。見ると幼児を連れた女性。事情を話すと「あなたの隣の方はengineerで親切だからお願いしてあげましょう。」数分すると作業着姿の男の人がやってきて「この家の暖房装置は古くて自動点火装置が壊れているんです。私の家で以前の使っていたものと同じですから、これで私が着火してあげましょう。」と云いながら器用にマッチとローソクで火をつけてくれた。ようやく一件落着。そのときマッチを見ると、驚いたことに日本のもの。「日本に行ったことがあるのですか?」と尋ねると「ええ、日立に仕事で。」まさに奇遇でした。

名前はColin Campbell。驚くほど親切な方でした。数週間後、買い物から帰ってきた我々に「毎週、水曜日の晩に買い物に行くけれど、よかったらご一緒しませんか」と声をかけてくれた。我々家族に車がないことを知ってお申し出でした。それから毎水曜日にSainsbury'sに。Uxbridgeを離れる日までこのshopping tourは続きました。Guy Fawkes Dayには「このcloseの仲間が集まってbonfireをやるので参加しませんか。」Valentine's Dayには「East Endに住む奥様のご両親が従業員や近所の方を集めて開く肩の凝らないdance partyを開きますが、ご一緒にどうですか。」「Blenheim Palaceへのpicnicはどうですか。」数え切れないほどの親切を受けました。

この一年間は家族にとってもっとも充実した素晴らしい時間でした。息子、健司は当時小学校6年生。短い滞在期間でしたが、「郷に入っては郷に従え」の諺どおりcomprehensive schoolに入れました。2nd yearに編入し、肩から大きなバッグを下げてHeathrow行きのdouble deckerに乗って学校に。日本人が一人もいない学校での勉強。Special Englishのクラスから始めて、あっと言う間に普通のクラスへ仲間入り。每晚、学校での出来事や行き帰りにおこるハブニングを話題に食卓を囲んで語り合い、違った文化に触れて逞しく成長しました。ところが帰国して一年半後の悪夢、英語学校の帰りに無謀運転の若いドライバーのために事故にあって世界。失意の中で

混沌としている我々に、Colin氏ご夫妻から一通の手紙。「健司のことは本当に悲しい出来事です。我々も何かできないかと考え、健司との思い出の地、Hampton Court Palaceに桜の木を植えました。こちらにお出かけの折りは是非見てください。」植樹のときの写真数枚が添えてあり、なんと元気づけられたことが。

1992年夏、英国を訪問したときにご夫妻の案内でHampton Court Palaceを訪ね、その桜を見て感激しました。このご厚意に何かご恩返しができないかにと考え、若い人の教育を支援しているThe Prince's Trustに少しばかりの寄付をさせて戴きました。このような交流も British Council Fellowship Grantsのお陰であると感謝しており、多少でもお役に立てればと常々思っている次第です。

(NAKAMURA Takato, 静岡大学工学部, Brunel University, 1987-88)

1965年秋から冬、英国の音楽会詣で

木村精二

今から30年前、初めての外国滞在がイギリスで、秋から早春にかけての半年間だった。昼間が短かく旅をするに最適な時期の代わり、音楽会シーズンとは重なり、(公務員制度の調査研究などという)いかめしい仕事の合間には、クラシック音楽会場などにせせと通った。右も左も判らず、言葉と習慣が違う異国の中に、突然放り込まれた毎日の生活の中で、長年慣れ親しんできた万国共通の言語である音楽を聴き、あるいは当時夢中だった歌劇を観るのが、最も安らぎを覚えるときであった。会場で求めたプログラムは、いずれも手元に残っているが、その数(大陸での3週間を含め)26週間に34枚で、内訳はオーケストラ16、オペラ9、バレエ4、室内楽2、歌曲3。また会場別ではロイヤル・フェスティバル・ホール12回、ロイヤル・オペラハウス5回、ウィグモア・ホール1回、ほかに国内4回、大陸12回であった。

首都とはいえ東京と何につけても異なる都会ロンドン暮らしの心細さは、特に、サウスバンクのロイヤル・フェスティバル・ホールを訪ねる度に、不思議にも解消された。灰色のコンクリート打ち放しのこのホールは、1951年に完成したという。続いて御目見得した上野の東京文化会館と、造りなどが良く似ているため、とても親しみを感じ、ふと日本に戻ったように錯覚しそであった。

ヒースロー到着早々、プリカン紹介のホテルに落ち着き(下宿に移ったのは数日後)、まず新聞で「今週のエンタテインメント」とかいう欄を見て知ったのは、聴きたい音楽会が毎日のように開かれ、しかも切符の値段が手頃で、1ペンス50円という(今では信じ難い程の)交換割合でも、出張旅費を使って賄えそう、ということであった。入手した同上ホールの無料パンフ「今月のイベント」1965年10月号から、少し書き写してみよう。

" 1日(金)オザワ・セイジ指揮「トロント・シンフォニー・オーケストラ」(チャイコフスキー作曲交響曲第5番、ラベル作曲シェラザードほか)、料金25/-~7/6。 3日(日)・コリン・ディヴィス指揮「ロンドン・シンフォニー・オーケストラ」ベルリオーズ作曲幻想交響曲ほか)、料金21/-~7/6。

4日(月)クルト・ウェス「ロイヤル・フィルハーモニー・オーケストラ」(ベートーヴェン作曲交響曲第5番、同ヴァイオリン協奏曲(独奏ナハン・ミルシュテイン)、ほか)、料金30/-~7/6。 5日(火)ジョン・ブリッチャード指揮「ロンド

ン・フィルハーモニー・オーケストラ」(ラフマニノフ作曲交響曲第2番ほか)、料金21/-~7/6。 7日(木)コリン・ディヴィス指揮「ロンドン・シンフォニー・オーケストラ」(ドヴォルザーク作曲ヴァイオリン協奏曲(独奏アイザック・スターン)、エルガー作曲交響曲第2番ほか)、料金30/-~7/6。

8日(金)キリル・コンドラシン指揮「モスクワ・フィルハーモニー・オーケストラ」(ベートーヴェン作曲ヴァイオリン協奏曲(独奏ダヴィッド・オイストラフ)、ブラームス作曲交響曲第3番ほか)、料金42/-~10/。

少しでも音楽に関心のある諸兄姉には説明不用だが、小沢・ウェス・ミルシュテインなど懐かしい音楽家がズラリと並び、曲目も魅力たっぷり。このように優れたオーケストラ演奏会が、最高でも2000円、またどの演奏会も最低が370円の席を多数用意する、というのは非常に親切だ。もちろん公的補助が相当に無ければ成り立つまい。それに加えて、料金の明確な表示ぶり---この点については少々説明が必要であろう。例えば3日の演奏会料金を正確に書き写すと、"21/-(efs)、15/-(cdghlm)、10/-(jnpt)、7/6(akor)"となり、括弧内は席のブロックを示す。別の表を参照し、日本円に直すと、1000円の席は1階中央部StallsのO~U列、1階後部Terrace A~C列、ボックスBoxes 1-9、19-24番; 750円席は1階中央部A~N列、1階後部D~O列、2階Grand Tier A~E列; 500円席は1階後部P~U列、2階F~L列、ボックス10-18、25-30番ほか、370円席はステージの後方Choir、1階後部W~Y列、2階M~O列など、である。このように料金体系が明示されているので、懐具合と好みで自由に席を選んで買い求める事ができたのは、本当に有り難かった。オペラについて、ひとことだけ記しておこう。1960年前後、NHKの招聘による数次のイタリア歌劇団が日本の音楽界を風靡した。筆者も影響を受け、前売りを求めて徹夜し、白黒テレビの中継画面に夢中になった一人である。訪英して入手したゴヴェント・ガーデンの真っ赤な地のチラシに驚いた。コソット、ベルゴンティ、グイ、ゴッピ、ファブリチスらの名がズラリと並んでいるではないか。ここは英国、イタリアではないのに、何故イタリア、いや世界最高級の歌手たちが揃って出演し、指揮棒を振るのか! こうした疑問が解消するのはズットあと、当時は驚きに続いて感激だった。最上階の席が500円(1階中央部でも3000円ほど)で、ヴェルディの「トロヴァトーレ」が確かに堪能できたのだ。

一流の音楽を多くの愛好家に等しく提供する、という伝統は受け継がれ、上記パンフに相当する、今や(当然のことだが)カラー刷りでしかも40ページ建ての充実した無料小冊子「サウス・バンク・センター」の1995年3月号を開くと、例えば、"14日(火)ウォルフガング・サヴァリッシュ指揮「フィルハーモニア・オーケストラ演奏会」(シューマン作曲ピアノ協奏曲、シュトラウス作曲ドン・ファンほか) £ 28 (cdefst)、£ 22 (bgluv) ~ £ 5 (ako)"とあった。1ポンド150円とすれば、最高の席でも4200円; また750円の席は、ステージの後方、1階後部W~Y列、2階M~O列などと読み取れる。30年を隔てて変わらぬシステムと、(円高の影響も大きい)2倍にしか上がってない最低料金に、深い感慨を覚えた。

10余年まえ忽然と(筆者が勝手にそう思ったに過ぎない)ロンドンの真ん中にバービカン・ホールが出現し、相前後して東京都心の再開発地区にサントリー・ホール等が出来た。しかし東京文化会館が健在であるか如く、ロイヤル・フェスティバル・ホールよ、いつまでも健在であれ、と訪英の度に願っている。

(KIMURA Seiji, University of London, 1965-66, 76)

ブリティッシュ・カウンシルの奨学金をいただいて留学したのが1974年から76年にかけてのことですから爾来早や20年になります。当時バーミンガム大学にありましたシェイクスピア研究所長のT・J・B・スペンサー教授にご指導を受けましたが、その時の研究テーマがシェイクスピアのNature観というものでありましたため、比較の意味でエドモンド・スペンサーを少し考察するようにとの助言を受けました。スペンサー教授に提出したレポートをもとに帰国後"The Idea of Nature in *The Faerie Queene*"としてめ纏め教授に送付いたしました。その年の秋スペンサー教授を招いて、広島は宮島でブリティッシュ・カウンシル主催の第1回英文学セミナーがあり、私も出席いたしました。教授はわざわざ私の拙論をお持ち下さり特別に時間を割いてチュートリアルをして下さいました。その時教授はすでに病をえておられ、手術後のことであったことなど私は知る由もなく、ただありがたく感謝しておりました。教授が亡くなられたのはその後間もなくのことです。

このようにして始まった私のスペンサー研究ですが、さすがに彼は「詩人の王」と呼ばれるだけのことはあり、なかなか奥が深くて少々の考察で片付くような詩人ではなく、その研究は今に及んでいます。英国ルネサンス期における自然・愛・美等の理念を追及するのが現在の研究テーマですが、この点から見ても、スペンサーはその時代において彼特有の地位を占める詩人であると言えます。興味はつきず、彼との格闘は一生の問題となりましたが、そのきっかけは英国留学にあったわけですから、まことに意義深い機会を与えていただいたことに感謝しております。

ところで大学教授といえ、講義の準備と論文執筆に明け暮れているというイメージがあるようですが、とんでもないことで、昨今の大学にはいわゆる「改革」の嵐が全国的に吹き荒れており、残念ながら研究の暇などなかなか見出せないのが現状であります。時勢の進展と共に大学の組織も改革されるのは当然ですが、大学の改革はあくまで学問的真理の追求が時勢の要請とマッチする接点を求めてなされねばなりません。真に生きた学問をやっておれば、おのずからそれを育てる組織が生まれてくるでしょう。その組織は今日の大学改革とは異なり、単純明快な筈であります。大学に限らずすべて組織は単純明快でありたいものです。

(TANAKA Susumu, 山口大学人文学部, Shakespeare Institute, University of Birmingham, 1974-76)

はがき通信

杉山忠平

「エッセイ」を書きたいのですが、4月5日から一学期間Clare Hallにvisiting fellowとして参ることになっているため「はがき通信」をもって代えさせていただくほかありません。遠い日(1956年)のBritish Council Scholarとしての最初の渡英いらい、何度目の訪英になるのでしょうか。感を新たにしております。この機会を利用してhonorary memberとして処遇を与えられているBritish Association for Japanese Studiesの年次大会(於 University of Sussex)にも久しぶりに出てみるつもりです。

この度、英国放射線学会のX線発見100年記念大会に講演のため、英国を訪れる機会がありました。訪英は、British Councilの奨学生としてRoyal Marsden病院に1年間留学して以来です。久しぶりに旧友とも再会しましたが、当時の紅顔の美少年(?)もお互いに白髪が増え、時の流れを感じずにはいられませんでした。

思いおこせば13年前、期待と不安、とうよりも不安だらけで香港経由、南回りの飛行機で単身ヒースロー空港に降り立って以来1年余りの短い期間でしたが、英国留学中は仕事の上でも、また社会生活の上でも、貴重な経験をいたしました。エジンバラの英語学校の3カ月はなんとか順調だったものの、ロンドン郊外のRoyal Marsden病院で研修を始めて間もなく、右足首の骨折という不覚をとり、慣れない生活環境や食事と不自由な言葉の中での苦闘でした。しかし、幸い回りの方々の親切もあって、仕事の面では専門の癌の治療、特に放射線治療の臨床の基本的な考え方を、その基になっている数々の文献と共に学ぶことができました。その時に勉強したことが、今でも私の癌の治療の根本思想になっています。

週末はロンドン市内のあちこちの公園で楽しみました。広い敷地に緑の芝生、木陰には栗鼠が走り回り、様々な花が咲き乱れ、水辺にはたくさんの水鳥が遊び、夏には演奏も楽しめるという、日本の公園とはスケールの大ききの違いに驚きながら。時には英国内だけでなくフランスやドイツ、スイスまで足を伸ばして観光の他、単に満腹するだけでなく満足できる食事をしたりしました。また、ロンドンでは大英博物館や美術館の訪問の他、ミュージカルが好きでよく見に行きました。今回の英国訪問中にもなんとか見たいものと思い、あちこちをお願いしていましたが、幸い「Miss Sigon」というミュージカルを見る機会が得られました。さすがに本場のミュージカルで東京で見た日本版とは比較にならない舞台を楽しませてもらいました。

今度はいつになるかわかりませんが、私の青春の心の故郷ともいえる英国に、また積極的に機会をつくって行ってみたいと思っております。

(HAYABUCHI Naofumi, 久留米大学医学部放射線科, Royal Marsden Hospital, 1982-83)

同時通訳こと始め

平 孝臣

近年の日本の脳神経外科学の発展はめざましく、最近では国内学会に海外からの参加者も珍しくありません。彼らのためにプロの通訳を雇う余裕はありませんので、学会員のボランティアが中心となって同時通訳団を結成しています。この夏も訓練合宿があり特訓を受けてきました。アポロ計画の通訳として有名な西山 千氏、同時通訳の開祖ともいえる村松増美氏などの講演をまじえながら、冷や汗や涙を流すわけです。かつて英国へ行ったときに味わった語学力の無さを再び痛感しています。まあ、これで生計を建てているわけではないのだからという居直りもありますが・・・。

(TAIRA Takaomi, 東京女子医科大学 脳神経外科, University of Birmingham, 1988-89)

ブリティッシュ・カウンシル 英国留学情報室の活動について

英国留学情報室長 高橋みのり

日本のブリティッシュ・カウンシルに、英国留学に関する情報を提供する Education Counselling Service (ECS) の部門が発足して今年で8年目になります。ECSの利用者は年々増え、昨年1年間で30,000件ものお問い合わせがありました。1988年-1989年の問い合わせ件数は約15,000件であり、過去5年間で利用件数は倍増したことになります。英国留学への関心の高まりは、ブリティッシュ・カウンシルにとりましても、英国留学の素晴らしさを自ら経験なさったBCJAの会員の方々にとりましてもたいへん喜ばしいことだと思います。

英国に留学されたい日本の方々のために、ECSは次のようなサービスを提供してきました。

1) 英国留学についての情報提供

ECSの資料室には各種教育機関の学校案内、コース便覧、ビデオ等の資料が揃っており、初めての方でも利用しやすいよう配置されています。コンピューターによるコース検索も可能で、CD-ROMの情報を使ってオリジナルのコースリストも作成しています。留学資料室としては、最も充実した施設の1つではないかと思えます。

2) 留学相談

ECS東京にはカウンセラーが私を含め4名、京都に2名、そして昨年6月に開館した大阪オフィスに1名おり、留学相談及び様々な留学に関する問い合わせに対応しています。

3) 留学関係のイベント開催

日本を訪れる英国の教育機関は毎年増え続けており、ECSでは、来日した代表者による学校説明会や個人相談会を実施しています。また、教育使節団として年に2回、20-30校の教育機関より派遣される代表者が来日し、東京及び西日本の1都市で留学フェアを開催してきました。西日本オフィスでは、1992年10月に大阪府国際交流財団、1994年5月には名古屋国際センター、同年10月には福岡国際交流協会との共催で、従来京都でのみ開催されてきた西日本地区の留学フェアを、大阪、名古屋、福岡でそれぞれ開くことができました。1995年10月には、札幌国際プラザのご協力により札幌での留学フェアが初めて開催されることが決定しています。

4) 地方での出張カウンセリング

ブリティッシュ・カウンシル西日本では、名古屋、神戸、広島、福岡、沖縄を定期的に訪れ留学カウンセリングを行い、また、西日本地区12の県や市の国際交流協会に英国留学の資料が利用できる Information Point を設置し、できるだけ多くの方々が ECS のサービスを提供できるよう努めてきました。

この活動は東日本にも広がり、昨年には新潟と札幌に Information Point を設け、東京のスタッフが定期的に出張カウンセリングを行っています。

以上のように ECS は日本の方々の英国留学をお手伝いする一方、英国の教育機関に対しては次のようなサービスを提供しています。

1) 日本の教育機関への紹介

英国の教育機関は、非常に日本人留学生の受け入れに積極的で、特に学生を派遣できそうな日本の教育機関との提携に強い関心を持っています。ECSでは日本全国の大学、短期大学に国際交流に関するアンケート調査をお願いし、英国との提携に関心のある教育機関の情報を把握していますので、英国より教育機関の代表者が来日する際には、それらの大学、短期大学を優先的に紹介することが可能です。

2) マーケティングのためのアドバイス

ECSでは、問い合わせの統計を分析したり、利用者アンケートを実施したり、また、教育関係機関を訪問することにより日本における教育市場の情報収集に努めています。英国からの多様な問い合わせに対応するために、1993年12月には ECS 専門の Market Research Officer を採用し、情報収集と分析に力を入れています。

このように、ECSは、英国留学を希望する日本人の方々日本人を受け入れたい英国の教育機関との橋渡しをしてきました。

これからも、できるだけ多くの方々が、自分の目的に合った留学を実現することができるよう、スタッフ一同努力していききたいと思います。

(編集部より: 英国留学希望の方がいらっしゃいましたら、ECSへ連絡されるのがよいと思います。)

(Tel : 03-3235-8031)

【原稿募集のお願い】

BCJA Newsletterは会員の皆様から広く原稿を募集しています。是非皆様の御協力をお願い申し上げます。英文、和文を問いません。原稿はOCRという機械を用いて、直接読み込みますので、できるだけ鮮明なワープロ原稿で十分な行間を開けて印刷したものでお願いいたします。最近ではフロッピーディスクを付けていただく方も増え、大変助かっています。ワープロ 東田機の独自のものは解

"New Sapporo Office"

The British Council is opening a new liaison office in Sapporo in October. The primary focus of the work will be the Education Counselling Service for Japanese students who are planning to study in Britain. The new liaison office will also act as a focal point for the development of the British Council's network of contacts in sciences, arts, and British Studies in Hokkaido.

The British Council, Sapporo
Sapporo International Plaza
MN Bldg., North 1, West 3, Chuo-ku, Sapporo 060
Tel : 011-211-3672
Fax : 011-219-1317

"New Members"

Mr Katsufumi KURIHARA, 大蔵省, University of Leeds
1994-95

Dr Mitsuko HAMAMURA, 九州大学歯学部, AFRC
Institute 1989-91

Dr Nobuya MORI, 大阪大学電子工学科, University of
Nottingham 1993-95

----"Books Received"----

「ももんが」(月間誌)
田中隆尚氏(会員)編集、
乙骨書店(03-3332-2819)
500円
文学を中心とした同人
雑誌

「備乏記」加古雅史氏(会
員)歌集、
1995、2500円 (06-380-
5971)

「高木兼寛伝」松田
誠 著、講談社
1990、1800円
ニューズレターNo.2の

編集後記

このニューズレターが皆さんのお手元に届く頃には、私はイギリスで楽しく仕事をしているはずなのですが、やむをえない事情で渡英は11月末までおあずけということになってしまいました。私のような専門分野では、なかなかイギリスに行く機会なんぞなく、実に6年ぶりということになります。8月にロンドンを訪れた友人の話では、この夏イギリスは大変な水不足で、公園の芝生も茶色っぽく冬枯れのようになっていたそうですが、水不足はもう解消したのでしょうか。とにかく早く行きたい。心はすでにロンドンです。

話は変わりますが、ご存じのように今年は「戦後50年」にあたります。そして全国で歴史をふりかえるさまざまな試みが行われています。私の関係しているある自治体史編纂委員会でも、「学童疎開50年を語る」と題する座談会を開いて、かつての疎開児童30名余りの方々にお集まりいただき、当時のお話をお聞きしました。戦後生まれの私には想像もつかないようなつらい思いをされたようですが、今のうちに記録を残しておかなければ、と感じます。

「学童疎開」は日本だけでなくイギリスでも同じようなことがありました。HMSOから出ているThe Second World War: A Guide to Documents in the Public Record Officeという本を見ると、英国国立文書館が保存しているEducation and Arts Departmentの記録ファイルには、戦時下のevacuation of school childrenに関する史料がたくさん含まれていることがわかります。イギリスの「学童疎開」は日本とくらべてどのようになされてきたのでしょうか。11月に訪英する折りに、できればそんなことも調べてみたいと思っています。

最後になりましたが、本号に原稿をお寄せ下さった皆さんはもちろんのこと、いつもながら原稿集めにご尽力下さった事務局の吉田和子さん、編集を一手にお引き受け下さった平孝臣先生、その他大勢の協力者の皆さんに心から御礼申し上げます。

安藤正人 (国文学研究資料館・史料館)

ニューズレター3号を発行しほっとしたのもつかの間、もう4号の編集締め切りとなってしまいました。この編集はコンピューターで行っていますが、昨今のコンピューターやFax、E-mail、Internetなどの発展普及により確かに便利にはなったものの、以前にも増して殺人的多忙を極めるようになった気がします。このため秋分の日のお休みにはベストセラーになっている情報と時間の「整理学」に関する本を2冊読みました。しかし机(3つ分)の上に散乱した雑誌、資料、スライド、さらにはコンピューターのフロッピーやファイルなどはどうも收拾がつきそうにもありません。安藤先生にArchivology?の立場からアドバイスをいただきたいほどです。

平孝臣
(東京女子医科大学 脳神経外科)